

令和八年度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

共通選抜 全日制の課程（追検査）

Ⅱ 国 語

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は **問五** までであり、1ページから14ページに印刷されています。
- 3 解答用紙の決められた欄に解答しなさい。
- 4 文字や数字などを記述して解答する場合は、解答欄からはみ出さないように、はつきり書き入れなさい。
- 5 マークシート方式により解答する場合は、選んだ番号の ○ の中を塗りつぶしなさい。
- 6 解答用紙にマス目（例：

）がある場合は、句読点などもそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 7 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受 検 番 号

番

問一 次の問いに答えなさい。

(ア) 次の a ～ d の各文中の——線をつけた漢字の読み方として最も適するものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | | | | | | |
|---|------------------|----|------|---|-------|---|-----|---|-------|---|
| a | 相手を威嚇する。 | (1 | はいせき | 2 | せいあつ | 3 | いかく | 4 | いあつ | (|
| b | 彼女は鋭敏な神経の持ち主だ。 | (1 | えいびん | 2 | しゅんびん | 3 | えいり | 4 | しゅんぱつ |) |
| c | この温泉には硫黄が含まれている。 | (1 | せつかい | 2 | りゆうき | 3 | いおう | 4 | じよう | (|
| d | 主役の座を譲る。 | (1 | まも | 2 | ゆず | 3 | え | 4 | と | (|

(イ) 次の a ～ d の各文中の——線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | |
|---|-------------------|---|------------------------|
| a | 親戚の会社にシュウシヨクする。 | 2 | 社長が今後のキョシユウを明らかにする。 |
| 1 | 自転車でホンシユウを縦断する。 | 4 | シユウブンの日は祝日と定められている。 |
| 3 | 仏教にはいくつかのシユウハがある。 | 2 | 小石でも車体にソンシヨウを与えることがある。 |
| b | 海外旅行でケイシヨウの地を訪ねる。 | 4 | 真剣にシヨウブをする。 |
| 1 | 改革案をテイシヨウする。 | 2 | 結婚してカテイを築く。 |
| c | 雷が原因でテイデンする。 | 4 | 剣道部の先生とのシテイ関係を大切にする。 |
| 1 | 路面電車がテイリュウしている。 | 2 | コサンの社員から指導を受ける。 |
| 3 | 鳥がテイクウを飛行している。 | 4 | 高校では寮にキシユクする予定だ。 |

(ウ) 次の短歌を説明したものとして最も適するものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

夕照雨はらはら光り輪のなかにわが里いれて虹たちにけり

結城 哀草果

- | | |
|---|---|
| 1 | 夕日を浴びて光りながら激しく降る雨を静止画のように描写しつつ、輪を描くように立ち現れた虹が「わが里」を見守っているように感じられたということを、擬態語を用いながら描いている。 |
| 2 | 夕日がさすなかで光を反射させながら降っている雨の様子をとらえつつ、まるで「わが里」を包み込むように虹が立ち現れたということを、離れたところからの視点を通して雄大に描いている。 |
| 3 | 夕日の照らす雨がきらきらと輝き続ける様子をとらえつつ、「わが里」から見上げた空にまるで曲線をなぞるように消えていった虹の様子を、擬人法を用いて臨場感を出しながら描いている。 |
| 4 | 夕日に照らされた雨が光りながら降っている様子を描写しつつ、虹が「わが里」から遠く離れた場所にかかって、世界を祝福しているように感じられたということを壮大な視点で描いている。 |

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ボランテアで野球の審判をしている「鍋島」^{なべしま}は、高校野球の京都予選で、打者の頭にボールを当ててしまった投手に退場処分の判定を言い渡したことを後悔していた。ある日、息子の「健輔」^{けんすけ}が事故で怪我をしたと妻から連絡が入った。大学入学を機に野球をやめて家から離れた「健輔」とはしばらく連絡を取っていないかった。入院している病院に急いで向かうと、大きな怪我ではあるものの「健輔」の意識はしっかりしており、一安心した。病室で二人きりになると、「健輔」が「鍋島」に向かって口を開いた。

「忙しいんだろ。来ることもなかったのに。」

どう反応するべきか迷った。沈黙に耐えて話題を探すのが面倒で、ふと、あれについて話してみる気になった。安心感がそうさせたのかも知れなかった。

「お前、あの判定どう思った。」

「判定？」

「ネットなんかで見なかったか？ 夏の京都予選の。」

「ああ——。」

健輔はちょっと俯^{うつむ}いて、口元を歪^{ゆが}めた。暫く沈黙がある。

「親父^{おやじ}らしいなって、思ったよ。」

息子の口からこぼれ出た言葉に、鍋島は時の流れを感じた。当たり前の話だが、息子はどう小さな手にグラブを嵌^はめて、必死でボールを追いかけていた頃の息子ではない。自分から遠く離れて生きている、一人の男なのだ。野球をやめると宣言した時の健輔からも、さらにさまざまな経験をして、自分の知らないものをその内側に積み上げつつあるのだろう。その声色は乾いて、静かで、父親にごく自然と対峙^{たいじ}する響きがあった。

「俺¹らしい、か。」

鍋島はそれがどういう意味なのか、よくわからなかった。前例に捉われない断固とした判断とか、厳しい態度のことを言っているのか——どうも、そうではないように感じた。

「事故って、いったい何があったんだ。」

健輔は上目遣いにちらりと鍋島を見てから、ギプスで固められた右足を擦^{こす}った。

「立てないと、いろいろ困るんだよね。」

鍋島が黙っていると、健輔は一つため息をついて両手を頭の後ろで組んだ。

「ちょっと大掛かりなセットを組んでただけで、その一番上で足を滑らせたんだ。角度が悪くて、そのまま舞台の下まで落ちた。」

「ブタイ？」

全く頭がない単語が出てきて、それが「舞台」だと理解するまでに時間がかかった。

「お前——今、何をやってるんだ。」

暫^{しば}しの沈黙の後、健輔は淡々と、駅までの道順を説明するような調子で答えた。

「親父は知らないと思うけどS座っていう劇団があって、その研究生。」

「それは——。」

鍋島は言葉を継ぐとしたが、そのまま絶句してしまった。健輔は、自分が全く知らない、これまでの自分の知識や経験からは隔絶された世界にいた。まず、食えるはずがないという思いが頭に浮かんだが、そういう発想がそもそも息子からズレ過ぎていて、口に出してもあとの会話が続かないのではないかと思った。

健輔は父親の胸中を察したように、今度は上目遣いでなく鍋島を見つめた。

「バイトをいくつか掛け持ちしてる。研究生と言っても一番の下っ端だから雑用ばかりだけど、それに生活のリズムは出てきて、機嫌よくやってたところだったのにさ。」

健輔は天井を見上げて自嘲的な笑みを浮かべながら、このザマだよ、と言った。

「バイトは、立ってやる仕事なのか。」

「飲食と、あと肉体労働系だね。でもまあ、ちょっと休めば何とかなるよ。」

「演劇は、前からやりたかったのか。その——高校生の頃から。」

鍋島の声は上ずっていた。健輔は黙ったまま、言葉を探しているようだった。

「そのずっと前からかな。きっかけは幼稚園の頃のオペレッタで、先生と友達のお母さんに褒められたこと。それ以来いろんなミュージカルのビデオ集めたり、^(注)アングラの現代劇を観に行ったり。いつか絶対舞台に立つんだって決めたのは、中学の時だよ。同級生に子役として映画に出た奴がいて、いろいろ教えてもらってたんだ。そいつとは夜はいつも連絡取り合ってた。S座も、そいつの知り合いからの紹介。」

鍋島は呆然とする思いだった。時の流れどころではない。自分が全てわかっているつもりだった高校生までの健輔も、その頃から全く自分の知らない顔をすっかり持っていた——その（考えてみれば当然の）事実²に打ちのめされた思いだった。自分が分かっていたのは、健輔の肩の強さと、百mダッシュのタイムと、怪我の状態だけだったのか——。

「²なんで、言ってくれなかったんだ。」

健輔は怪訝^{けんげん}そうにこちらを向いた。

「何を？ 親父に野球以外のことをやりたいなんて、言えるわけがないじゃないか。」

「しかし——。」

「言ってほしかった？」

鍋島は黙った。どうだろう。もし健輔から野球をやめて演劇をやりたいと打ち明けられていたら、自分は受け入れることができただろうか。

「無理だよ。多分一発ぶん殴られて終わりさ。——勘違いしないでほしいんだけど、俺は親父を責めてるんじゃないくて、これでも感謝してるんだ。俺のためにあんなに一生懸命やってくれた。それはよくわかってる。仕事も忙しいのに、何をおいてもまずは俺の野球だったもん——別のことをやりたいなんて、言えるわけがないよ。」

「³健輔は穏やかな顔をしていた。」

「でもあの頃は、あのままだと演劇なんてとてもやれないし、何とかしなきゃって焦^{あせ}ってた。結局何も説明せずに逃げ出す形になっちゃったけど、野球から離れる方法はあれしか思いつかなかったんだ。」

「逃げ出すほど、嫌だったのか。」

「そうじゃないって。野球は楽しかったし、好きだった。でも、演劇の方がもっと好きだったってこと。けど、その気持ちは親父には絶対にわかってもらえないだろうと思ってた——それぐらいガキだったんだ。」

健輔は声を出さずに笑った。

「だから、来てくれたのにはすごくびっくりした。野球をやめた俺なんて、親父にとって何の意味もない存在だろうって思ってたから。」

「馬鹿なことを言うな。」

「さっき、親父が来るかどうかお袋と賭けたんだ。俺が来るはずないよって言うのに、お袋は絶対に来るって……。やっぱり、俺って今もガキなんだって、よくわかった。」

⁴ 鍋島は妙な気分だった。健輔の言っていることは、本来の自分なら決して許さない類^{たぐい}の話のような気がする。だが健輔と直接話すことで、感じていたはずの息子へのわだかまりが薄らいでいく。むしろ、会話に心が浮き立っている。自分は息子と話したかったのだ。

ここへ来るまでの間、気が気ではなかった。かけがえのないものが永遠に失われてしまうのではないか、その恐怖に苛^{さいな}まれた。息子が出て行った後、くだらない意地を張って連絡を取ろうとしなかった自分を呪った。自分は決して、野球をする息子だけを愛していたわけではない。息子がどんな生き方をしようとも、それを肯定し、支えたくてたまらなかったただけなのだ。

「演劇っていうのは、よくわからんが——。」

「いいよ、無理にわからなくても。俺もまだ全然わかんないし。」

「楽しんでやれてるのか。」

健輔は少し視線を落として、考えている。

「親父は、審判するのは楽しい？」

「そりゃあ……きついこともあるが、まあ、楽しんでるとも言えるかな。」

「それと一緒にだよ、たぶん。」

鍋島はゆつくりと頷^{うなず}いた。

「そうか——まあ、しっかりやれ。」

健輔は今日何度目かに、びっくりしたような目を鍋島に向けた。

（木住^{きすみ} 鷹人^{ようと}「危険球」から。一部表記を改めたところがある。）

（注）オペレッタ＝歌にセリフを交えた、喜劇的な音楽劇。

アングラ＝「地下の」の意の「アンダーグラウンド」の略。ここでは実験的な演劇・映画などの芸術運動のこと。

(ア) —線1「俺らしい、か。」とあるが、そのときの「鍋島」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 息子がいつの間にか大人になり、父親と対峙していることに戸惑いつつ、突き放すような返答をした息子と向き合うことに困難を感じ、息子との対話をこれ以上続けることをあきらめている。
- 2 息子が厳しい態度について指摘してきているように感じたが、大人びた返答をした息子を前にして、今の息子と向き合うことが大切だと気づくと同時に、息子の意外な成長に喜びを覚えている。
- 3 息子が野球をやめて、自分から離れてしまったことに対して寂しさを感じつつも、今は一人の大人として、父親の判断を尊重してくれているという確証を得られたことに安心している。
- 4 息子がもう子どもではなく、自分にはうかがい知れない成長をしており、一人の自立した存在として父親と向き合っていることに感慨を覚えるとともに、息子の返答の意味をはかりかねている。

(イ) —線2「なんで、言ってくれなかったんだ。」とあるが、ここでの「鍋島」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 野球をやめて演劇の世界に入ってから息子についてだけでなく、自分がわかっていると思い込んでいた息子のことも、表面的にしか理解していなかったと気づき、動揺しているように読む。
- 2 野球より演劇の方に気持ちが向いていたという、自分の知らなかった息子の本当の気持ちを知り、息子と積極的に関わろうとしなかった過去の自分への怒りを、息子にぶつけるように読む。
- 3 演劇のことを正直に話してくれば受け入れられるという確信はあったが、息子が今になって本音を伝えてきたために、責める気持ちが湧いてくるのを自覚し、怒りを抑えているように読む。
- 4 高校生までの息子が無理に野球を好きであるとよそおっていたことが判明し、二人で共に励んでいた野球が、自分のよく知らない演劇に負けたように感じ、困惑した気持ちを表すように読む。

(ウ) —線3「健輔は穏やかな顔をしていた。」とあるが、そのときの「健輔」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 当時の自分が未熟だったことに加えて、焦る気持ちがあったために、演劇の世界で生きていくことを認めてくれなかった父親から逃げ出すしかなかったという過去の状況を、冷静に見つめ直している。
- 2 演劇をやりたいという本音を、父親に打ち明けることすら考えずに逃げた自分の行動を反省しつつも、忙しくても野球を一番に考えて支えてくれた父親の姿に愛情を感じて、和やかな気持ちでいる。
- 3 自分の本当の夢を、当時の父親が理解してくれようとしていたことを知り、演劇の道に進みたい一心で父親に反発していたことを申し訳なく思いながらも、感情的にならずに過去を受け入れている。
- 4 野球をしていた自分を支えてくれた父親への感謝の気持ちはありつつも、野球以上に演劇が好きだということについて、父親に言えなかった当時の自分の焦りや未熟さを、落着いて振り返っている。

(エ) ―線4「鍋島は妙な気分だった。」とあるが、そのときの「鍋島」を説明したものととして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 今までなるべく関わらないようにしてきた息子から、父親を一方的に責め続けるような話をされているにもかかわらず、直接思いを伝えてきてくれていることを喜んでいる自分に困惑している。
- 2 父親の思いを決めつける息子の言いように腹を立てつつも、互いに本音を隠さずぶつけ合うことで、親子の共通の思い出が今も二人の関係をつないでいると感じていることを不思議に思っている。
- 3 自分には受け入れられないような話を息子がしているにもかかわらず、息子に対する心の距離が縮まりつつある上に、息子と話すこと自体に心が弾んでいる自分の心のありように戸惑っている。

- 4 過去の親子関係にこだわっていることを息子から指摘されているにもかかわらず、息子との会話自体を楽しんでいることに加えて、互いが本音で話すことができているという事実に当惑している。

(オ) 「健輔」が「鍋島」に向けたまなざしについての描写によって、「健輔」の内面はどのように表現されているか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 自分の気持ちについては、明確に示したいという意志が表現されている一方で、父親の気持ちについては言葉はなくとも理解している様子を表すことで、大人びた面を持つことが表現されている。
- 2 父親に自分の隠してきた本音を話すことをためらう様子や、父親の機嫌をうかがうような様子を表すことで、無意識に父親のことを全面的に信頼するような、幼い面を持つことが表現されている。

- 3 ためらいや父親と向き合う意志を表したり、父親の意外な言動への当惑を表したりすることで、大人びたところもあるが、父親の気持ちをまだ理解できていない面もあることが表現されている。

- 4 ごまかしや、父親に対する不満を表しながらも、演劇を続けてほしくないという父親の考えに正面から向き合う態度を示すことで、自分の意志を貫こうとする頑固な面もあることが表現されている。

(カ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「鍋島」が息子の成長した姿と向き合い、息子の考えや演劇のことを完全には理解できないながらも、徐々に息子の人生を肯定的に受け入れられるようになっていく様子を、対話を通して描いている。
- 2 「鍋島」が演劇の道に進んだ息子の姿に戸惑いつつ、過去のわだかまりを抱え続けたまま、父親としてあるがままの息子を受け入れられるようになっていく姿を、表情の変化を通して描いている。

- 3 どんな状況でも息子と本音を伝え合ってきた「鍋島」が、父親と対等であろうとする息子の姿に頼もしさや寂しさを感じながらも、変わらず愛情を注いでいこうとする姿を、回想を交えて描いている。

- 4 息子との対話を望んでいた「鍋島」が、高校生の時期から父親との関係を断ってしまっていた息子へ懸命に話しかけることで、心が通じるようになっていく様子を、心情描写を中心に描いている。

問三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

境界を作るのが言語の本質だ。目の前にマンモスがいる。目の前のマンモスと言うときに、それはその周囲にある木や、人間あるいはほかの動物とは異なるものであることを示している。つまり、眼の前の風景の中からマンモスの輪郭を描いている。人間の言語の特徴は、さらにその言語の空間の中だけで成立する抽象性があることだ。単なるマンモスと言うことで、目の前にいるマンモスだけではなく、さまざまな場所にいるマンモス、あるいは実在しないマンモスまでも表現する。A、抽象的な空間における象徴的な存在の輪郭を指し示しているのだ。

たとえば犬についても考えてみよう。猫でも狐でも狸でもない犬である。さまざまな大きさや形の種類の犬がいる。犬というものがなんであるか、猫でも狐でも狸でもない犬、その概念を持つためには、猫や狸や狐のような、犬ではない動物についての知識がなければいけない。犬という概念が確立されるためには、それ以外の動物についての意識がなければいけない。犬という概念を確立するための脳のしくみは、さまざまな動物を見た結果、犬ではないさまざまな動物と犬に属する動物とを区別する、その境界を描くシステムである。その境界を描くというプロセスには言語は必要ない。言葉を覚え始めた幼児でも、犬という概念を持ちうる。犬という概念を作る際に必要なのは、言語によるさまざまな犬の定義、たとえば哺乳類であるとかいう情報だけではない。多様な動物に関する膨大な、主として視覚的情報が必要になる。しかしながら、たとえば犬というものを識別するに至った幼児と大人との間で、犬という概念に相当する動物について意識を共有する場合には、言語が必要になる。まず、外部からの情報、たとえばさまざまな動物についての情報に対し、それを大きな織物のように構築し、その中に「犬」を区別する境界を作る脳の動作がある。そこで確立された境界、区分、それについて他人との間で共有する際には、言語が必要になる。¹言語は世界を認識するためには必要ない。世界の中で特定のものを境界で区別する際には言葉は¹いらぬ。少なくとも個人にとっては必要ない。しかしながらその世界認識を他者と共有する場合には、どうしても言語が必要になる。

言語は、最初は他人とのコミュニケーションのために成立したと考えられるが、その後、人間はひとりで言語を使って思考する、言い換えればシミュレーションするという作業を始めた。そこで行われたシミュレーションの結果を外部環境と照らし合わせ、それが正しいかどうかを確認する、そのくり返しで、人間はその言語というものを、世界を表象し、解析するための道具として進化させてきた。驚くべきことは、その抽象的な概念、抽象的な場の中で、現実の時間、空間から離れて一種のシミュレーションが²でき、それが、現実世界でも役に立つ予言ができることだ。

その中で、最も際立っているのは数学だ。おそらく最も洗練された、言い換えれば誰にでも共有しうるように工夫された抽象は、数学である。 $1+1=2$ 。ここで1はリングでも星でもかまわない。一つのリングの隣にもう一つのリングがあれば、二つのリングである。そこではリングという現実の物体、重さや色や香りや味があるもの、それらが言わば無視されて、「一つ」=1という記号にされている。この徹底的な抽象化によって、逆に現実世界を記述し、予見することが可能になった。ニュートン力学では、リングと地球を同じ一つの存在だと極端に抽象化して万有引力の定義を見出だし、地球上の高い場所から離れた物体が、その後の時間変化の中で占める場所を予見できるようになった。数学の特異な機能は、その徹底した抽象に基づく。

³数学は特異な発展を示した。非常に抽象度が高い情報をもとにシミュレーションを行い、それを外部世

界と照合することによって、より世界の、宇宙の本質に近い議論ができる道具として発展させてきた。数学的情報は抽象度が高いために、さまざまな言語の違いを超えて共有でき、多くの数学者あるいは自然科学者がその向上に加わり、その精度は非常に高いものになってきた。そして、ついには人間は、目に見えない素粒子の世界や宇宙の起源についても議論できるに至った。これは有史以来の人類の長期にわたるシミュレーションと、その照合の結果によるものであり、さらには世界、宇宙のしくみの本質が境界的因子に基づく抽象的なシステムであることに由来すると考えられる。

数学的なシミュレーションを続けることによって、人間が生まれ持つ感覚機能を超えた世界、宇宙のしくみや素粒子の性質を予言することができたのは、宇宙の成り立ちが、さまざまな場が接する境界のふるまいに由来するからだと考えられる。境界を抽出する能力を持った人間であるからこそ、生得的な感覚を超えた世界や未来を予見することが可能になったのだらう。しかし、言語⁴というものは抽象化プロセスの一つの表れであって、個人の創造、あるいは科学的な発見も、言語に先立って存在すると考えられる。

数学的な方法が世界を把握するのに有効であることを知ったために、人間は高慢になった。数学は、そして言語というものは、人間の脳の機能のごく一部にすぎないのであるが、人間は言語で世界を把握できると考え始めた。言語で語る意識が、あるいは意識だけが世界を把握できると思いつき始めたのである。数式などの記号を含む言語は、人間が世代を越えて共有できる情報であり、そのシステムの進化は、遺伝子による進化とは比較にならないほど速い。言語は明らかに人間の繁栄をもたらしたが、創造の起点においては、非言語的と言うべき脳の機能が重大な役割を果たしている。創造する人は、たとえ科学者であっても、創造の瞬間には言語を離れている。物理学者が新しい原理を発見する際、その瞬間においては、言語は必要がないらしい。たとえばアインシュタインがそうだった。以下、彼のコメントだ。「私の考え方の機構の中では、書かれあるいは語られた形での言葉というものは、何の役もしていないようである。私の考え方の機構は、多少ともはつきりした目でみえる像、また、あるものは筋肉を使う型のものになっている」。

B その発見を他者と共有する際には、たとえば数式などの言語情報が必要になる。

言語による情報の蓄積から、創造するために飛躍するとき、創造者は言語から離れなければならない。^(注)なぜなら言語情報はすべて既存のものであり、創造は既存のものではないからである。ナラティブモジュールが、人間の創造の基本だと思う。創造したなにごとか、それを他者に伝える際に必要なのが、数式などの言語、^(注)ストーリーモジュールだろう。作曲家が楽譜を書く、あるいはピアノなどで演奏する、それもストーリーモジュールだ。音楽モジュールと言ってもいい。あるいは画家や彫刻家にも、イメージを表現するためにキャンバスや絵具、粘土や石を使って形にしてゆく方法、技術が必要で、美術モジュールとでも名づけようか。そして詩や小説では、言語を使って言語で表現できないイメージを描く。文学モジュールと呼ぼうか。

言語は人間の脳の機能、その一部を表象するものであるから、それを研究すること、論じることによって、人間の脳の機能が、潜在的な現象も含めて、明らかになることは多いであろう。しかしながら、特に創造というできごとを論じる場合には、言語的解析では到達できない現象がある。少なくとも、言語の限界について、つまりは意識の限界を、心に留めておく必要がある。それが人間の高慢を防ぐ。

(傳田 光洋^{でん みつひろ}「境界で踊る生命の哲学」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) アインシュタイン＝ドイツ生まれの理論物理学者(一八七九―一九五五)。

ナラティブモジュール＝時間の経過や経験を通して変わっていく個人の感覚機能のこと。

ストーリーモジュール＝時間の経過があっても変わることのない情報を、脳内で表現する機能のこと。

(ア) 本文中の A・B に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|---|------|---|--------|---|---|-----|---|------|
| 1 | A | そして | B | 言い換えると | 2 | A | また | B | 要するに |
| 3 | A | たとえば | B | その上で | 4 | A | つまり | B | しながら |

(イ) 本文中の~~~~線Ⅰの「で」と同じ意味で用いられている「で」を含む文を、次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | |
|---|----------------|---|-----------------|
| 1 | この機械は電気で動いている。 | 2 | 体育館でスピーチ大会を行う。 |
| 3 | 寒さで手がかじかむ。 | 4 | パソコンの修理は三日でできた。 |

(ウ) 本文中の~~~~線Ⅱの語の対義語として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 1 | 理想 | 2 | 真空 | 3 | 皆無 | 4 | 架空 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|

(エ) ―線Ⅰ「言語は世界を認識するためには必要ない。」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 個人が視覚情報をもとに確立した概念を他者と共有する際は、言語が必要となってくるが、特定のものの境界を描いて概念を確立する過程においては、言語を用いることは不可能であるから。
- 2 個人の中で特定のものの概念を確立するときは、言語によって境界を描くことが主な手段となっているが、世界を認識する段階においては、言語を用いることが必要であるとは限らないから。
- 3 人間が特定のものの概念を個人で確立するにあたっては、主に視覚情報を用いて境界を描いており、確立した概念を言語化することなく他者と共有することで、世界認識を可能にしているから。
- 4 個人が特定のものと他のものとを区別し、境界を描くことによって概念を確立する際は、視覚情報を主とした多くの情報を手がかりにしており、必ずしも言語を用いているわけではないから。

(オ) ―線Ⅱ「その抽象的な概念、抽象的な場の中で、現実の時間、空間から離れて一種のシミュレーションができ、それが、現実世界でも役に立つ予言ができることだ。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 具体的な事象にとらわれずに、言語を用いて模範的に思考した結果を検証することによって、それまで解析されていなかったようなことを、現実 に即して予言できるようになったということ。
- 2 他者とともに言語を使用するという模範的な思考を始めたことによって、世界を解析する道具として、言語を進化させられるようになった結果、未来の予言ができるようになったということ。
- 3 現実の具体的な事象を言語を使ってとらえることによって、目の前のあらゆる事象を正確に記述できるようなった結果、これから起こる事象を、模範的に予言できるようになったということ。
- 4 抽象的な世界を個人が解析する手段として成立した言語を使い、模範的な思考をくり返すことで、具体化されていないような事象について、現実 に役立つ予言ができるようになったということ。

(カ) —線 3 「数学は特異な発展を示した。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 数学は抽象的な概念で成立しており、限られた人数の数学者でも十分な成果を出すことが可能になったことで、短期間のうちに目に見えない世界の本質に高い精度で踏み込んだということ。
- 2 数学は抽象度のきわめて高い事象を扱えるため、言葉や時代の違いを超えてコミュニケーション結果の共有が可能となり、抽象的なシステムで成り立つ世界のしくみの本質に迫ってきたということ。
- 3 数学は目に見える範囲のみを記述することで発展してきており、境界に由来する世界を議論するために長期間使われてきたことで精度が向上し、抽象的な概念の理解に近づいてきたということ。

- 4 数学は非常に抽象的な概念を用いており、言語の違いや時代を超えて高い精度での世界のシミュレーションができ、目に見えている世界のより明確な理解につながるようになってきたということ。

(キ) —線 4 「言語というものは抽象化プロセスの一つの表れであって、個人の創造、あるいは科学的な発見も、言語に先立って存在すると考えられる。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 世界の事象を表現して共有する際は言語が必要になるが、言語で抽象化されるより前に、既存のものを抽象化することで、創造したり発見したりする段階がやってくると言えるだろうということ。
- 2 人間は創造力で科学的な発見や未来の予見を成し遂げてきており、言語が事象を抽象化するより前から、具体的な言語情報を用いて、創造や科学的発見がなされてきたと言えるだろうということ。
- 3 抽象化の一形態である言語は、既存の物事を情報として扱う際に使用されており、既存のものではない創造や発見は、言語による抽象化がなされるより前に存在していると言えるだろうということ。
- 4 言語情報は既存のものではないとされるものであり、発見を他者と共有する際に使われてきた一方で、創造や発見は言語に先立って、既存ではないものを生み出していると言えるだろうということ。

(ク) 筆者は本文を通して、「意識」についてどのように述べているか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 概念の確立の過程では、言語化が必要とは限らないとされているものである一方、創造の場を通して考えると、言語化によって世界を把握できるという勘違いを生むということがわかるものでもある。
- 2 言語によって表象されることを通して、世界を把握できるものであるが、創造の場においては言語化されないまま扱われており、他者との共有をすることが不可能であるとされているものでもある。
- 3 言語を通して世界を表象する際に必要とされるものであり、特に既存ではないものを創造する場合には、言語で語られるものを用いるべきとされ、言語化に際して制約があるとされるものでもある。

(ケ) 4 言語と同様に抽象的な事象をそのままの状態で表象する場面で機能するものであり、言語を通して他者と共有されうるものであるがゆえに、人間の創造力と深い関わりがあるとされるものでもある。本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 言語の働きが脳の機能の一部にすぎないことを指摘し、言語や数学的な方法によって世界を把握することの危険性について述べながら、人間の高慢さが言語や数学を生み出したことを批判している。
- 2 人間の言語能力の発達によって高慢さが生み出されていく過程を述べつつ、世界の把握には言語が不可欠であると主張する一方で、創造においては言語的解析が不十分であると警鐘を鳴らしている。
- 3 世界を認識する際の境界の役割について具体例を挙げて示しながら、数学を含む言語や人間の特徴について論じた上で、言語の有効性が人間の高慢さを生み出したということを批判的に述べている。
- 4 境界を描く能力について言語と非言語の両面から分析し、言語的な側面を持つ数学だけが世界を把握できると主張した上で、言語に関わる脳の機能が人間の高慢さを生み出したと主張している。

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

望遠鏡とほめがねといふ物、異国より渡り始めける頃、世（世間のみなにもはやされた）にこそつて弄（注）ばる。権現様より紀伊大納言殿へ御目に

掛けらる。大納言殿ことのほか御喜びにて、御国元の櫓やぐらへ御上おあがり、所々御覧になられ、御秘蔵（とても大切になされて）浅からず、

折節曲輪くろわの外、はるか向かふを御家の士通りけるを眼鏡にて御覧じ、その人の着くる紋までもありあり

と見え、顔も明らかに見えければ、御機嫌なめならず、¹「誰彼も見よ。」とて、興じたまひける。その夜

家臣安藤帯刀出仕有りに、この眼鏡のこと御話有りて、帯刀に見せたまひけるに、帯刀何とも御答へは

これ無く、その眼鏡を申し受け携たづさへ出でて鎗やりの間の敷居に打ち付け、打ち碎きて退出せらる。

大納言殿これをお聞きになられ、御小姓（注）兩人に仰せ付けられ、「帯刀心付かざる様に、あとより付きて

参る様子を見さうらへ。」とのこと故、御指図のごとくしければ、帯刀は直ちに宿所へ帰り、そこにて小

姓衆を見つけて申せられけるは、「殿は各を御付けやられさうらふ。眼鏡と申す物は、敵の陣場、あるい

は船中など御覧ず。又は御慰みならば森林遠山などを御覧さうらひ得ば御重宝のことなり。総じて万物共

に用ひ様により、よき物も悪あくなり申しさうらふ。今夜御話のごとく、御城下をたえず目の下に御覧こ

れ有りては、³もつてのほかなる害にさうらふ。その所以ゆゑんは、太守（注）たる人の櫓に登りて城下の様子直ちに御

覧と承らば、下々の者かの道を通りかね申すべし。さしあたりこればかりも下の煩わづらひにさうらふ。その上、

下々には常々不作法多く、酒興などには色々異形のことともこれ有り。それをもつて気を養ひ申しさうらふ。

これ一つは御奉公のためにさうらふ。かく申す某それかしなども陰の暮らしを御覧になられさうらば、御あきれ

ならるべし。その他にも、御見限りに逢あひさうらふ者多く出で来つかまつるべくさうらふ。異国の聖主賢

主は、下のことを直に見聞かじとて、冠に目簾めすだれを下（注）げ左右に耳金をつりたまふと承る。一国をも治めた

まふ君は、御了見有るべきことにさうらふ。」と申し上げらる。

大納言殿御若輩とは申せども、さすが名譽の君にて、この諫めをお聞きの後は、望遠鏡のこと、再びお

詞にも出だされずとかや。

〔「感入録」から。〕

（注）権現〓ここでは、徳川家康（一五四二―一六一六）のこと。

紀伊大納言〓ここでは、徳川頼宣（一六〇二―一六七二）のこと。権現の子。

曲輪〓城やとりでの周囲に築いた土や石の囲い。

安藤帯刀〓安藤直次（一五五四―一六三五）のこと。紀伊大納言に仕えた。

鎗の間〓金属製のやりが飾ってある部屋。 太守〓一国の領主。

目簾〓目を覆うすだれ。

耳金〓金属製の耳飾り。

(ア) —線1「『誰彼も見よ。』とて、興じたまひける。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「大納言殿」は、はるか遠くを通った家来の着ていた服の家紋や顔の様子までも、望遠鏡によってはっきり見えたことに喜んで、周囲の者にも望遠鏡を使ってみるように勧めている。

2 「大納言殿」は、城の外を行き来する家来の生活までもが、世間で評判の望遠鏡でありありと見えることへの不安をごまかすために、はしゃいだ様子で家来に望遠鏡を押しつけている。

3 「大納言殿」は、高所での見張りに望遠鏡を用いることによって、遠くの敵陣の様子や敵の服の家紋までもが鮮明に見えたことに興奮し、家来にも望遠鏡をのぞかせようとしている。

4 「大納言殿」は、望遠鏡を使用しても、遠くを歩いている人物の表情や詳しい服の模様まではわからないことに落胆したが、代わりに望遠鏡で周囲にいる家来の顔を見て喜んでいる。

(イ) —線2「御小姓兩人に仰せ付けられ」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 気に入っている望遠鏡を突然奪い取って壊した「帯刀」の行為に腹を立てて、「大納言殿」が、仕えの者二名にあとを付けさせて、「帯刀」を見つけ次第その場で処罰を与えようとしている。

2 望遠鏡に関する話を聞いた上で望遠鏡を受け取り打ち壊したという「帯刀」の行為に対して、「大納言殿」が、仕えの者二名に「帯刀」のあとを付けさせて、行為の意図を探ろうとしている。

3 「大納言殿」は、部屋に入ってくるなり周りの者たちに望遠鏡を壊させた「帯刀」の真意を知りたいと思い、仕えの者二名に「帯刀」の様子を探らせた上で、話を聞き出そうとしている。

4 「大納言殿」は、「帯刀」が何も言わずに望遠鏡を壊したという行為の意図を聞き出したいと思い、「帯刀」が容易に気づけるように仕えの者二名を送り、その場で話を聞こうとしている。

(ウ) —線3「もつてのほかなる害にさうらふ。」とあるが、「帯刀」がそうに言った理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 望遠鏡を使い城下の様子を詳細に見ようとすると、家来が城下の道を避けるようになることによって、君主が家来の様子を正しく把握しようとしても、かえって知ることができなくなると考えたから。

2 監視するかのよう望遠鏡を使うと、家来にとっては城下の道を通りづらくなり迷惑であるだけでなく、奉公のための息抜きでもある行為を君主にあきらめられて、見捨てられることにつながるから。

3 家来の隠してきた君主に対する無礼なふるまいが、望遠鏡によって露見することで君主の怒りにふれ、行為への厳しい措置がとられることにつながり、奉公をしようという家来の気持ちが薄れるから。

4 望遠鏡を、家来の様子の観察のために使うようになると、家来のあきらめるような行為ばかりに君主の目が向いてしまい、敵の監視や気休めといった望遠鏡の本来の使い方が軽んじられると考えたから。

(エ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「大納言殿」は、家来の生活や望遠鏡に興味を持ちながらも、「帯刀」の厳しい忠告を受けてからは家来の話題を控えるような、周囲の者たちとの調和を重視する繊細な心を持った人物であった。

2 「大納言殿」は、「帯刀」の優れた君主に関する例え話が意味するところを理解できずに、望遠鏡の使用の禁止を言い渡されるといった、好奇心旺盛ではあるが未成熟な部分もある人物であった。

3 「大納言殿」は、家来である「帯刀」の過激な行為を伴う理不尽な訴えにも積極的に耳を傾けて、家来全員に望遠鏡の使用を禁止する命令を出すような、行動力がある上に真面目な人物であった。

4 「大納言殿」は、「帯刀」の一見すると理不尽に感じられる行為の真意を誠実に受け止めて、望遠鏡の話題を出さなくなるような、若いながらも国のことを考えられる柔軟で賢明な人物であった。

問五

中学生のKさんは、「人間の進歩」について興味を持っている。調べるなかで、人間の認識や思考の仕方が「人間の進歩」と関係しているのではないかと考え、二つの文章を読んでいる。次の【文章1】、【文章2】は、そのときのものである。これらについてあとの問いに答えなさい。

【文章1】

明示性の畏^{わな}は、ごく日常の自分の認識を振り返ってみても感じるができる。たとえば、人の顔を認識する際に、私たちはその人「らしい」様子を捉えている。目、鼻、口、輪郭などの部分を明示的に定義しているのではなく、顔の部分から顔全体に向かって注意を払っていく。「この人は○○さん。」と間違いなく認識できても、部分の特徴を明確に述べることは相当に難しい。これは技能の場合も同じで、諸部分の動きに注意を払うと、全体の統合が揺らぐことがある。

ピアノistがあまりに指先に注意を集中させると、演奏動作が麻痺^{まひ}することがある。あるいはアスリートが各部位の動きに気を取られると、パフォーマンスが落ちてスランプに陥り落ちることがある。「ムカデのダンス」という寓話^{ぐうわ}が、このことをよく表している。ある森にダンスの上手なムカデがいた。羨ましく思ったカエルが「ムカデさん、なぜそんなに上手に踊れるの？ 何番目の足から動かすの？」と聞くと、思い出そうとしたムカデは混乱してしまい、その後すっかりダンスを踊れなくなってしまった、という話だ。

人間は、明示的に受けているわけではない情報、「らしさ」や「雰囲気」や「気配」といった類いの情報を、暗黙のうちに「了解」することができる。そこに問うべき何かがあるという直観と、その探究の先に現れる「不意の確証」は、明示的に認識されない領域から湧いてくる。

(安藤^{あんどう} 昭子^{あきこ}「問いの編集力」から。一部表記を改めたところがある。)

【文章2】

およそ哲学的な主題はすべて僕たちの日常的な経験知^{もつち}を以ては太刀打ちできない難問です。どれも、それが何であるかを言うことができない概念なわけですが、それが何であるか言うことができない主題についても人間は考えることができる。

例えば、「神」というのは人知を超えた存在ですから、それがどんなものであるか、人間には確定的なことは言えないはずです。「神」という概念についての一意的な定義はあり得ません。人間を超えたものなんですから、人間が創り出した概念に回収できるはずがない。でも、だからと言って「神」という概念は一意的に定義されていない語だから、それを使うのは止めようという人はいません。それが何を意味するのかわからない概念を用いて僕たちはふつうに会話したり、議論したりすることができる。

「それが何を意味するかわからない概念を用いて会話し、議論できる。」ということって、よく考えたらすごいことだと思いませんか。たぶんこのすごいことをすることを通じて、人類はだんだん賢くなってきた。この作業は言い換えると、「主題となる概念の決定をペンディング^(注)したまま、ある程度の時間にわたって思考することができる。」ということです。

(内田^{うちだ} 樹^{たつる}「知性について」から。一部表記を改めたところがある。)
(注) ペンディング＝事柄がまだ決まっていない状態にあること。保留。

- (ア) Kさんは【文章1】と【文章2】を読んで、内容を次のようにまとめた。【Kさんのメモ】中の
I・IIに入れる語句の組み合わせとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ
選び、その番号を答えなさい。

【Kさんのメモ】

【文章1】	【文章2】
○人間の認識の仕方についての具体例 ・人間の顔の例……部分から全体へ注意を払う。 ・ピアノリスト、アスリート、ムカデのダンスの例 ……部分に注意を払うと、全体の統合が揺らぐ ことがある。(明示性の罫) ○人間の認識について ……明示的に認識されない領域が、 I。	○人間の思考の仕方についての具体例 ……「神」というのは、人知を超えた存在 であるため、 II。 ○人間の思考について ……人間は、それが何を意味するのかわ からない概念を用いて、思考をし続 けることができる。

- 1 I 統合の揺らぎの原因となる
2 I 全体的な情報の統合を手助けする
3 I 直観や不意の確証の源泉になっている
4 I 部分的な特徴を明確にする
II 確定的な定義づけは不可能である
(イ) Kさんは【文章1】と【文章2】を読んで考えたことを次のようにまとめた。【Kさんのまとめ】中
の
に適することばを、あとの①～④の条件を満たして書きなさい。

【Kさんのまとめ】

まず【文章1】を読んで、人間が情報を認識するときのことを学んだ。人間が物事を認識する際は、
部分の特徴を明確化しなくとも、情報を全体として認識できる場合もあると述べられていた。つまり、
人間には、はつきりとは捉えているわけではないものを、おおまかなものとしてそのまま認識できる
側面があるということだろう。

次に、人間がどのように思考するのかについて知りたいと思い、【文章2】を読んだ。【文章2】に
は、何を意味するかわからない概念を用いて思考する際の人間の特徴について書かれていた。人間は、
意味がはつきりと一つに定まっていない概念を用いる際に、その概念の意味を一つに定めずに保留し
たままの状態で、ある程度の時間にわたり思考し続けることができるということである。

ここまで、人間の認識や思考の仕方について学んできて、はつきりとは捉えていないものについて
どのように扱っているのかという点に、人間の特徴が表れているのではないかということに気づいた。
この特徴は、「人間の進歩」と関わりがあるのかもしれない。

以上を踏まえると、人間は、はつきりとは捉えていないものについて、
という特徴を持つ
といえる。次は、「人間の進歩」について、違う観点からも考えていきたい。

- ① 書き出しの人間は、はつきりとは捉えていないものについて、という語句に続けて書き、文末の
という特徴を持つといえる。という語句につながる一文となるように書くこと。
② 書き出しと文末の語句の間の文字数が三十字以上四十字以内となるように書くこと。
③ 【文章1】と【文章2】の内容に触れていること。
④ 「暗黙」「決定」という二つの語句を、どちらもそのまま用いること。

(問題は、これで終わりです。)